

Sumitomo Foundation News Vol.25

大阪・関西万博が終わって

記録的な猛暑が続いた2025年の夏は、大阪・関西万博の夏でもありました。当初心配された集客も予想以上で、結果的に収支が黒字になったと言われています。予想以上と言えば、住友館がここまで人気のパビリオンとなったのも、多くの方にとっては予想外だったのではないのでしょうか。開幕早々から入場予約がなかなか取れず、まさにプラチナチケットと化していました。

筆者が訪問した時のことですが、最後のパフォーマンスが終わると、客席から自然と拍手が沸き起こりました。そして、「住友って、すごいね」、「企業グループとしてこんなに自然を大事にしているんだね」、「住友のことをあまり知らなかったけれど、好きになったかも」、などという声があちらこちらから聞こえてきました。

住友グループとして何を大事にしているのかを、多くの方々に知っていただくのは大変重要なことだと思います。その意味で、今回の住友館は大成功だったと言えるのではないのでしょうか。

住友財団は、住友グループとしての社会貢献を進めるために設立された財団です。助成財団として、資金の提供をすることが主目的ですが、それだけに留まらず、助成対象者それぞれがより良い活動が続けられるように工夫をしていく必要があります。

財団の活動を多くの方々に認知してもらうことが、財団の活動の活性化にもつながると考えています。近年の助成プログラム見直しに伴い、助成完了者を招聘してのイベント(日本関連研究助成:「住友コンフェレンス」、環境研究助成:研究発表会)や、修復した文化財の展示に対する支援(修復文化財展示事業助成プログラムの開始、財団主催展示会の実施)等を始めています。(日野)



住友館全景



住友館の中に、住友財団のパネル(基礎科学、環境、日本関連、文化財維持修復の4枚)も展示されました

北川進先生 ノーベル賞受賞 おめでとうございます

先日、ノーベル化学賞を受賞された京都大学副学長北川進先生は、1997年度の住友財団基礎科学研究助成の助成対象者です。今後とも将来花開く基礎科学研究への支援を続けて参ります。

主な活動内容(2025年8月~10月)

8月	基礎科学研究助成 第一回選考委員会開催
9月	基礎科学研究助成 第二回選考委員会開催、環境研究助成 第二回選考委員会開催 アジア諸国における日本関連研究助成 募集(~10月)
10月	第73回理事会開催 国内外文化財維持・修復事業助成、修復文化財展示事業助成 募集(~11月)

基礎科学研究助成

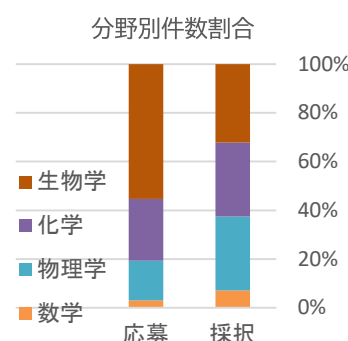
2025年度も、4/15～6/30募集、その後の選考を経て、10月の理事会で助成対象が決定されました。今年度は、大幅な制度改正を行った初年度となりますが、制度改正の狙いとしたところは概ね達成できたのではないかと考えております。

【主な制度改正】

- ・応募可能年齢は45歳以下とする。
- ・応募対象となる研究分野は「数学・物理学・化学・生物学」（複合分野や工学の基礎分野の研究は各分野に含まれる）とし、該当すると思われる研究分野を申請者自らが指定して応募する。
- ・助成金額は申請金額と同額とし、減額しない。
- ・助成金総額を2億円とし、数学を除き各分野ほぼ同額の助成金配分とする。

【応募状況】

応募件数は885件と昨年度より94件減少しました。分野別に見ると、数学27件、物理学144件、化学225件、生物学489件でした。申請金額の平均は389万円と昨年度より41万円増加し、過去最高を更新しました。応募者の平均年齢は38.3歳となり、昨年より2.6歳低下しました。



【選考・採択状況】

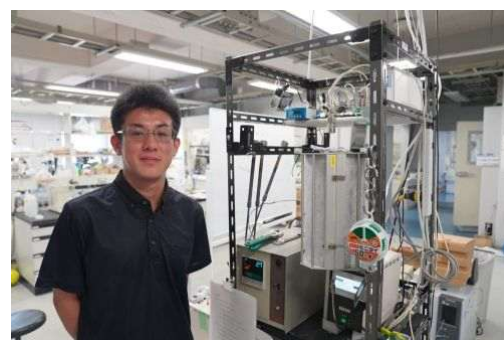
選考は、例年通り選考委員長を含む13名の選考委員によって、2回の選考委員会を通じて実施されました。今年度の採択件数は56件、昨年比では15件の減少となりました。分野別に見ると、数学4件、物理学および化学は17件、生物学は18件となり、応募件数の多かった生物学の申請者には特に厳しい採択率となりました。また、助成金総額は2億39万円で、1件平均358万円は過去最高、助成対象者の平均年齢は37.3歳で、昨年から1.9歳低下しました。制度改正で目指した、若手研究者への助成の充実は進めることができたと考えています。

【採択された研究事例紹介】

脱石油依存の有力な炭素資源として期待されるメタン(CH_4 最も単純な構造の炭化水素)に関する挑戦的な課題の基礎研究で採択された20歳代の若手研究者をご紹介します。

大阪大学 大学院工学研究科 助教 中谷 勇希さん

研究テーマ：「高効率な非酸化的メタンカップリング触媒システムの構築によるメタン直接変換」（共同研究者1名）



○応募のきっかけ

助教として2年目を迎え、良い研究結果が出始めたので、助成を受けてこれをさらに発展させたいと考えていました。萌芽的な内容を対象とする助成プログラムは限られる中、本研究助成が「基礎分野における萌芽的研究への支援」ということを知り、応募させていただきました。

○助成が決まった感想

実は、民間の財団からの研究助成をいただくのは今回が初めての経験でした。過去の採択実績から、倍率が10%未満という非常に狭き門であったため、正直なところ採択は難しいだろうと半ば諦めていました。それだけに、採択決定のメールには驚き、共に研究に励む学生と喜びを分かち合いました。そしてより一層研究に精進したいと思いました。

○この研究テーマを取り上げた理由

世界的な脱石油依存の流れが進む中で、新たな炭素資源の有力な候補の一つがメタンですが、その堅牢な分子構造ゆえに、メタンから有用な基幹化学品を直接合成することは極めて困難とされています。

メタンカップリングはそれを可能にするための一つの手段ですが、「夢の触媒反応」とも称されるほど難易度の高い課題です。しかし、これまでに培ってきた触媒合成技術、反応条件の最適化、そして装置設計に関する複合的な知識と経験がこの難題に挑戦する上で生かせると確信しています。これまでの積み重ねがある「今だからこそ挑戦できる」という思いが、本テーマを選定した最大の理由です。

○この研究の可能性と今後やりたいこと

メタンカップリングは数ある触媒反応の中でも、特に過酷な反応条件を要します。本研究で得られた知見は、その他の炭化水素の転換反応にも応用可能であると予想されるため、より広範な反応に有効な触媒の開発を進めていきたいです。また、今回のテーマで反応装置設計の重要性を深く感じました。今後は触媒合成から反応、さらにはシステム設計までを包括的に研究することで、革新的な触媒システムを構築していきたいと考えています。

環境研究助成

2025年度も、例年通り4/15～6/30募集、その後の選考を経て、10月の理事会で助成対象が決定されました。

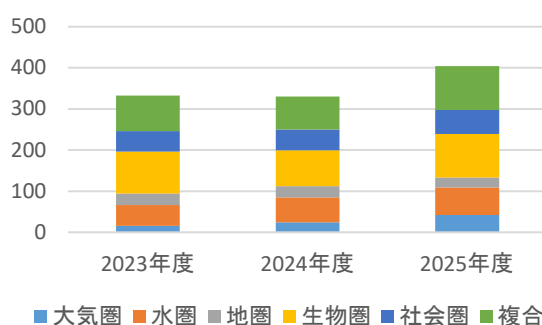
【応募状況】

一般研究の応募状況は、404件(前年度比+74件)と前年度比約2割の増加となり、右表の通り、今年度も多岐にわたる分野の申請がありました。募集課題を「地球のネイチャーポジティブを実現するための学際的または国際的研究」とした課題研究に対しては、46件(前年度比+23件)と倍増となりました。

【選考・採択状況】

今年度の選考は、選考委員長を含む8名の選考委員によって2回の選考委員会を通じて実施されました。採択は、一般研究が31件(総額7千万円)、課題研究が3件(総額3千万円)の合計34件(総額1億円)となりました(前年度は一般研究34件、課題研究3件の37件)。一般研究については、応募数の増加、採択数の減少により、採択率は、前年度の10.3%に対して7.7%へ低下しました。分野は、自然科学系27人、人文社会科学系4人となり、所属機関別では23機関に分散しております(最大は東京大学4件)。採択者の平均年齢は41歳となり、25歳から61歳まで幅広く分布しております。また、女性の採択者は7名となり、女性の採択率10.6%は、全採択率7.7%を大きく上回っております。助成金額は、平均226万円、最大400万円、最小80万円となり、申請額に対する充足率の平均は69%となりました。一方、課題研究については、幅広い研究提案が寄せられましたが、人間社会との係わりを含めた地域研究2件を含む3件が採択されました。2026年度のテーマも今年度と同じ「地球のネイチャーポジティブを実現するための学際的または国際的研究」です。

環境研究(一般研究)分野別応募件数推移



【採択された研究(一般研究)事例紹介】

「ラオスにおけるモンの人々と自然環境とのつながりの変容——養蜂を事例に」

(研究概要)

(京都大学 大学院人間・環境学研究科 続木 梨愛 後期博士課程2年生 による研究)

本研究では、ラオスのモンの人々による養蜂実践の変容を手がかりに、少数民族と自然環境との関係がいかに変化しているのかを明らかにします。具体的に(1)森林政策と資源アクセスの変容、(2)養蜂技術と知識体系の再編成、(3)商品化と民族間資源競争に着目し、質的調査と自然科学的調査から複合的に分析のうえ、生活実践・知識体系・技術選択といったミクロな側面から、自然と権力の関係を多層的に捉え直すことを試みます。

○応募のきっかけ

環境問題の解決には、それぞれの土地や状況に合ったアプローチが必要です。住友財団では多面的なアプローチを支援していることに加え、潤沢な助成額によって現地に長期滞在し、人々の生活に寄り添った緻密な調査が可能だと考えたからです。

○助成が決まった感想

本研究の重要性・実現可能性を評価いただき、大変うれしく思います。現地の人びとの暮らしや環境の変化を見つめながら、学問的にも社会的にも意義のある成果を残せるよう頑張ります。

○この研究テーマを取り上げた理由

私はこれまで日本国内の養蜂について研究を行ってきました。そのなかで、ラオス・シェンクワン県で日本のNPOが蜂蜜の市場化を進める技術支援を行っていることを知り、強い関心を抱きました。かつて自然と密接に生きてきた少数民族モンの人びとの生業が、外部の支援や市場経済の中でどのように変化しているのかを明らかにしたいと考え、博士課程から本研究を始めました。

○この研究の可能性と今後やりたいこと

本研究テーマを含む私の大きな関心は、環境問題へいかに向き合うのかという部分にあります。特に、さまざまな花木から蜜や花粉を集めるミツバチは環境指針動物として扱われ、現在では「ミツバチがいる場所は自然が豊かな場所だ」と言われることもあります。このようなミツバチとの関わり方が、人びとの環境への意識をどのように変容させるのかを明らかにし、環境問題の解決に資するような研究を行っていきたいです。



【シェンクワンの世界遺産、ジャール平原にて】

アジア諸国における日本関連研究助成

マレーシア訪問

2024年度のアジア諸国における日本関連研究助成の応募総数は891件でしたが、そのうちマレーシアからの応募は449件と全体の半分を占める状況です。マレーシアの大学では、研究者・教員が海外からの助成を受けることで高く評価されるシステムが一般的のため、各大学が競って海外からの助成プログラムに対し応募する状況です。同国からの応募には秀逸な案件も見られるものの、一方で残念ながら助成プログラムの趣旨を正しく理解していない応募や、稚拙な内容での応募も多く見られます。このため今回の出張では、各大学への単なる応募勧奨ではなく、研究管理部門を中心に訪問し、各校での助成プログラムに対する取り組み状況の確認や今後の対応について打ち合わせを行いました。各校ともに海外からの助成プログラムは大学の評価、研究者・教員の評価に重要な位置付けであり、申請にあたっては事前のチェック、過去の助成対象者をメンターにした指導制度などを実施しているとのことでしたが、今後はさらに事前チェックや指導を強化していくとのことでした。住友財団としても、先般作成した紹介ビデオを有効に活用してもらい、日本とアジア諸国の相互理解に資するより良い研究テーマの応募が増えることを期待していると伝えました。



マラヤ大学研究管理部門
との打ち合わせ

住友コンフェレンス 2025

今年で3回目となる『住友コンフェレンス2025』は、第Ⅰ部が9月28日(日)に、第Ⅱ部が10月4日(土)にオンラインにて開催されました。「アジア諸国における日本関連研究助成」の延長線上の取り組みとして、過去の助成対象者の研究成果を共有し、同分野の研究者同士や選考委員が接する機会の醸成を目的にした開催です。企画運営は過去2回同様、東京大学東洋文化研究所「Global Asian Studies」プログラムとの共催という形で実施されました。今回の発表者は2020年度の助成者を対象に、優れた研究成果報告の中から『アジアの中の日本・再訪(Japan in Asia Revisited)』というサブテーマの下に5名が選出されました。

第Ⅰ部(英語)には50名強、第Ⅱ部(日本語)には30名強が参加。リード役(司会、討論者)からの有効な問い掛けのお蔭もあって、昨年よりさらに進化した形での双方向の有益なコミュニケーションがなされたと感じました。さらなる改善を模索しつつ来年度以降も継続開催して参ります。

アジアの日本研究(3):アジアの中の日本・再訪

*司会 園田茂人教授(東京大学)

*挨拶 当財団 日野常務理事・事務局長

第Ⅰ部:戦時中の東南アジアの「日本」(英語) 9/28(日)14:00-15:30

*ワン・モハマド・ユソフ・ビン・ワン・チック(マレーシア スルタン・ザイナル・アビディン大学)「ブキット・ベシ鉄鉱石鉱山における日本の産業遺産とトレンガヌ州観光産業振興の可能性」

*ルオン・ティ・ホン(ベトナム社会科学院)「新しい市民になるか、社会から排除されるか:北ベトナムにおける日本兵のポストコロニアル史の研究、1945-1960年」

*ホセ・エリザー・レイエス・ベルサレス(フィリピン サンカルロス大学)「戦前・戦中期セブ島の日本人コミュニティ、1900-1945年」

*討論者 川島みどり名誉教授(上智大学)

第Ⅱ部:東アジアの文化的コネクション(日本語) 10/4(土)14:00-15:30

*鄭敬珍(韓国 茨城キリスト教大学)「18世紀日朝文人ネットワークと雅集 - デジタル人文学の観点から」

*黄智慧(台湾中央研究院)「日台共通の文化遺産となり得る『台北昭和町』家屋群の今日的価値-保存・活用・継承の可能性を探る-」

*討論者 西野純也教授(慶應義塾大学)

